

生電波

西田悠哉

永淵大河

生電波

西田悠哉
永淵大河

〈登場人物〉

端中保男（ヤス）……26歳。大学中退。かつて勤務していたコールセンターでトラブルを連発し対人恐怖症に。軽い引きこもり状態でおよそ2年がたつ。被害妄想、周囲監視、パニック症傾向。先週にそれに関連した近所トラブルを起こしたばかり。ノブにのみ。悪態をつくような形をとることで会話ができる。社会に適合しているノブを内心で尊敬している。不器用。

端中信男（ノブ）……24歳。ヤスの弟。不動産営業。入社2年目。潔癖症傾向。上京し、心を病んだ兄のヤスと同棲生活を始める。器用で優しいが、女性と付き合う度、弟が原因で別れている。社会に過適合しているところがあり、本人は気づかないところでストレスを抱え、ぼろがでることもある。

入島愛（アサ）……24歳。NPO 団体事務員。入社2年目。ノブとは2か月前に比較的真面目なマッチングアプリで知り合い、付き合う手前の仲。趣味は酒とバイクと Wikipedia 編集。正義感が強く、行動派。大学までは海外にいた。時々主張が強く、周囲とずれを感じることも。

吉堂健（ヨウジ）……45歳。「キチキチキッキン」チャンネル運営者。自然食にこだわる料理家。趣味はもちろん料理。収入は YouTube ミ食材のネット代行販売。他人に深入りしないタイプの中年で、中庸を好む。

間宮（マジキ）……ヤスとノブが住む部屋の隣の住民。年齢、性別不明。

〈舞台〉

舞台は老朽化したアパートの一室。6畳の和室。ヤスとノブの兄弟の部屋。一昨日に引っ越ししてきたばかりで、ところどころに段ボールが積まれている。

この作品において、電化製品は全て段ボールで表現される。

部屋の中央の机が置かれその上にパソコン、上手にラジオ、下手にテレビ、奥に電子レンジが置かれている。

舞台下手が玄関、上手はベランダへと繋がっている。

舞台前方は窓、奥側は隣室（間宮の部屋）となっている。

この作品において、電波はアルミホイル製の合羽を着た俳優によって表現される。

6畳の和室の両端には空っぽな空間が広がっており、テレビやラジオなど電波の向こう側の景色は、その空間において、登場する俳優たちの兼ね役によって演じられ、この脚本では網掛けで示される。

それは、誰もが電波の間に立つ時代において、誰もが代替可能な存在であることを示す。

(部屋)

端中保男（以下、ヤス）、板付きで部屋の中央に立っている。

上半身裸でスクワットをしながら一人で何かを話し始める。

（ヤスの言動の多くは隣人・間宮の言動の模倣となっている）

ヤス「……おはようさん！ああ、どうもどうも、初めまして、あれ？初めてじゃない？いやまあ、なんにせよ、ごきげんよう！ところで、どうですか調子は？良いよーって方、逆にあんまり良くないよーって方、

……はいはい、まあつまるところ、ボチボチってところでしようなあ、まあそもそも調子つて何だよって話ですが、まあ悪くないなら何よりです、

……じゃまあ、良いですか、とつておきのもの用意してるんですよ、こつちは、良いですか、よく耳の穴、目の穴、ケツの穴、かつぱじ開いくださいね、良いですか？かつぱじ開いてくださいよー良いかー？良いですかー？いくぞー、いきますよー、いつちやいますよ、

……ズットコベロリンチョすんぞー！」

やや間

ヤス、謎の言葉を発した自分に動搖する。

ヤス「……ズットコベロリンチョ？」

後ろを振り返る。隣室の壁に耳を当てる。

再び着信音が鳴る。

ヤス「うるせえ、しつけえなあー！」

ヤス、携帯を取る。
着信音止まる。

ヤス「……もちもち、あ、違う、もしもし、

……なんだよ、

……いや、なんでもない、

……なに？ ベランダ？ 飛ばされそうなもの？ あるわけねえだろ、何も干してねえよ、ああ？ そうだよ、そもそも開けてねえよ、わかったわかった
……え？ なんだよ？ ドン引き？ え？ ポン引き？ え？」

雨の音。

ヤスの遠方に、弟の端中信男（以下、ノブ）が浮かび上がる。
ノブ、アルミ製の合羽を着て携帯電話越しで話し始める。

(電話)

ノブ「違う違うコンビニ、帰りにコンビニ行くから、なんか買ってこうかって、」
ヤス「なんかってなんだよ」
ノブ「いや、兄ちゃん晩飯まだでしょ？」

ヤス「ああ、」
ノブ「いいもので良い？」
ヤス「良いに決まってんだろ」
ノブ「はいはい、」

ス「あとあのグリーンの、水」

ノブ「ゲータレード？」

ヤス「違う違う、ガワの話」

ノブ「いろはす？」

ヤス「ちげえよ、なんか、カラダ？みたいな、かわいい色の」

ノブ「ああ、M I U？」

ヤス「ちげえよ、だから、だ・か・ら！あ……そうだよDAKARAだよ！だからだって！」

ノブ「んん？」

ヤス「だから、DA・KA・RA！GREEN DA・KA・RAだよ、ハートの」

ノブ「ああ、あの小便小僧のCMの」

ヤス「いつの話してんだ、」

ノブ「え？」

ヤス「今はやたら可愛いガキだろ」

ノブ「あそつか、」

ヤス「お前は何も知らねえな」

ノブ「まあね～」

ヤス「あくしろ」

ノブ「はいはい～」

ヤス、電話を切り、再び隣室に耳を傾ける。
おもむろにラジオの電源を入れる。

(ラジオ)

ヤスがアンテナの向きを調整すると番組の音声が明瞭に聞こえる。

女「……えー、どうやら、台風がかなり近くまで接近しているようです、皆様引き続きくれぐれも、警戒してください、では早速本日のゲストを紹介しましょう、今ネット話題の人、『日本大好きおじさん』です、」

男「バンザイ！神と仏に守られた美しい国、ニッポン！どうも『日本大好きおじさん』です」

女「ああ、本物です」

男「はい正真正銘、本物です！嫌いなものはタイ米と差別と壳国奴、どうも『日本大好きおじさん』です」

女「はい、どうも」

男「玄米食つてりや百年安泰、どうも『日本大好きおじさん』です」

女「なるほど、十分なご紹介ありがとうございます、大丈夫です」

男「え、もういいの？」

女「はい、十分な紹介を頂きました」

男「んん……」

女「えー、ということで、『日本大好きおじさん』、ちょっと長いですね、何とお呼びすればよろしいでしょうか？」

男「ああ、じゃあ、ニッポンダイで！」

女「ああ、ニッポンダイ、日本大学みたいで良いですねえ」

男「ニッポンダイ！ニッポンダイ！ニッポンダイ！ニッポンダイ！ニッポンダイ！ニッポンダイ！（＊日本体育大学 2016年度卒業式における、アメリカンフットボール部「日本大コール」のリズムを参照）」

女「愉快な方でーす」

(部屋)

ノブ、いつの間にか部屋へと帰つてきている。

ノブ「なにこれ、日本大コール？」

ヤスは咄嗟にラジオの電源を切り、慌てておもちゃのライフルを構えるヤス。

ヤス「曲者！」

ノブ「うわ、ちょっとやめ、やめて、危ねえ危ねえ」

ヤス「なんだよ」

ノブ「何それ、どつからそんなん取り寄せたん」

ヤス「アマゾン」

ノブ「アマゾンでライフルって、地獄の默示録じゃないんだから、」

ヤス「あれは、アマゾンじゃなくてカンボジア」

ノブ「あそつか、まあ同じようなもんしょ、ザックリ言えば」

ヤス「ザックリ過ぎんだろ、」

ノブ、合羽を脱ぐ。

ヤス「ちよつ、おま、ザックリな上にビツチヨリじやねえか！」

ノブ「もうそこの近所の川、大荒れよ（と、ビニールから買つてきたものを出す）」

ヤス「なんで」

ノブ「知つとけよー、少しは外のこともさ」

ヤス「はあ？」

ノブ「ニュース見てないの？台風来てて大変なんだから、
ヤス「ソトのことよりウチのことだろ」

ノブ「なに？」

ヤス「……ズットコベロリンチョつて、なんだよ」

ノブ「はあ？なにそれ？ズンドコベロンチョじやなくて」

ヤス「それは何だよ」

ノブ「世にも奇妙な物語」

ヤス「違う、ズンドコベロンチョじやなくて、ズットコベロリンチョ」

ノブ「知らないよ」

ヤス「流行つてんじやねえの？」

ノブ「聞いたことねえわ、なにそれ、どこで聞いたの？」

ヤス「いや、隣人が、」

ノブ「ちよもうマジやめてー」

ヤス「なにが？」

ノブ「お隣さん、監視しないでよ」

ヤス「監視じやねーよ、耳そばだてたら聞こえてきたんだよ」

ノブ「だから、そばだてんなって言つてんの、」

ヤス「いいだろ、そばたてるくらい！そばだたさせろ！ゾババーン！」

ノブ「なんなんだよゾババーンって！」

ヤス「知らねえよ！」

ノブ「まあまあアレだけど、真似してないよね？」

ヤス「ああ？」

ノブ「次こそ本気で前科ついちゃうよ」

ヤス「うるせえな」

ノブ「(スマホを取り出し) あんま気にすんなって、その声多分アレだよ、酒か発狂かセック

ス、「

ヤス「酒か発狂かセックス！？」

ノブ「そんな驚くことじやないって、普通普通」

ヤス「普通つてなんだよ、」

ノブ「社会つてそんなもんだから」

ヤス「社会こわすぎ……」

ノブ「こわくないこわくない（と、スマホを見る）」

(スマホ廣告)

男・女「ホントの私、デビュー！」

男「やせたい、モテたい、脱毛したい！」

女「やせたい、モテたい、脱毛したい！」

男「いっぱい食べたい！いっぱい飲みたい！」

女「飲んで飲んで飲んで！」

男「ニッポンダイ！ニッポンダイ！ニッポンダイ！ニッポンダイ！ニッポンダイ！」

ツボンダイ！」

(部屋)

ノブ「またアイツだ……」

ヤス「しようもねえもの見んなよ（と、ノブのスマホ奪う）」

ノブ「違うよ、広告、広告」

ヤス「飛ばせよ」

ノブ「飛ばせねえんだよ」

ヤス「広告ばつか見てると、頭腐るぞ」

ノブ「見たくて見てないから」

ヤス「くだらねえもん見てるから、くだらねえ広告が出んだよ」

ノブ「ああ、アルゴリズム的な」

ヤス「これはお前の写し鏡なんだよ」

ノブ「はいはい……」

ノブ、バスタオルを取り出し、風呂場へ行こうとする。

ヤス「なに？ 風呂？」

ノブ「そうだけど、」

ヤス「え？」

ノブ「……ワツツハブン？」

ヤス「隣は昨日、ごはん先だったみたいだけど」

ノブ「ちょ、もう隣いいから、」

ヤス「風呂先って、ちょっと変、とかない？」

ノブ「変じやないでしょ」

ヤス「先にご飯にしたら？」

ノブ「なに言つてるの？」

ヤス「いや、まあ」

ノブ「買い物忘れたんだわ」

ヤス「俺の分買ったのに自分の忘れたの？」

ノブ「うん」

ヤス「（怒る勢いで）優しいかよ！」

ノブ「おいあんま暴れんなって、夜なんだから」

ヤス、びくつとしておとなしくなる。

ノブ「……お医者さんも言つてたじやん、気にしすぎつて」

ヤス「うつせえわ」

ノブ「いい？もう満足？風呂入れちゃうよ？」

ヤス「（スマホを触りながら）飯が先が普通じゃねえの」

ノブ「（のぞきこんで）うわ、調べんなよそんなもん」

ヤス「ああ！」

ノブ「なんだよ」

ヤス「結論..人さまざま」ってなんだよ！『いかがでしたか？』じゃねえだろ』

ノブ「テオプラストスだ」

ノブ、風呂へ。

ヤス、再び隣の壁に耳を当て、ラジオをつける。

(ラジオ)

女「ニッポンダイさんは、普段どのような活動をしてらっしゃるのでしょうか？」

男「運動です」

女「ああ、ジョギングとか」

男「いえ、社会的な運動です」

女「ああ、なるほど」

男「ソーシャルな方のね」

女「具体的には？」

男「日本を良くする運動です」

女「もうちょっと具体的に教えていただけますでしょうか？」

男「ええ、なんで？」

女「ああ、まあそういう場なので、」

男「失われた古き良き日本の魂を取り戻す運動です」

女「ああ、すごい」

男「ニッポン دائ！ニッポンدائرة！ニッポンدائرة！」

女「ニッポンدائرة！ニッتوندائرة！ニッتوندائرة！」

(部屋)

ノブ、風呂からあがつてくる。

ノブ「また聞いてんの？」

ヤス「勝手に聞くなよ！（と、慌ててラジオを切る）」

ノブ「聞こえるんだからしようがないじやん」

ヤス「聞きたくねえなら耳塞げ！」

ノブ「むちやくちやだろ、」
ヤス「むちやくちやなんだよ、」

ノブ「で、わかつた？」

ヤス「なにが」

ノブ「飯が先か後か」

ヤス「わかんねえよ」

ノブ「言つたつしょ、ネットに答えはないんだって」

ヤス「うつせえなあ！わかつてるよ」

ノブ「ごめんごめん、（窓のから外を見て）ああ、結構本格的になつてきたな」

ヤス「ああ？」

ノブ「雨。ちょっとチャンネルとつて」

ヤス「なんだよ」

ノブ「チャンネル」

ヤス「お前さあ、」

ノブ「いや、そこにあんじやん」

ヤス「これはチャンネルじやなくて、コントローラー（と、リモコンを差し出し）」

ノブ「（被せて）コントローラーね、はいはい（と、受け取る）」

ヤス「お前ホントになんも知らねえんだな」

ノブ「うるさいうるさい、はい一時停止！（と、リモコンをヤスに向ける）」

ヤス「おい、それこっち向けんな！」

ノブ「いや大げさだな」

ヤス「気分悪いだろ、なんか」

ノブ「ごめんごめん、よいしょ」

ノブ、テレビをつける。

(テレビ)

気象ニュース、台風情報が流れ始める。

明らかに効果音とわかる暴風の音。

女、アルミ製の合羽を着て登場。

女「はい、こちら現場よりお伝えします！北米から到来した超大型台風キヤサリン・ゼタ・ジヨーンズは猛烈な勢いで本州に接近し、今までに上陸せんとしています！せんと、しています！そして、今、今、上陸しまー、した！せんとしていた台風が、今上陸しました！こちらは立つていられないくらいの風と雨、あと木やら虫やら何やかんやで大変でーす！あー大変だー、一旦、お返ししまーす！」

男、登場。

男 「はい、カット！ちょっと効果音止めて！」

突然、暴風音が止み、静寂。

女 台風にこらえる体制から何事もなかつたように戻る。

男 「オツケ！良いね！最高！」

女 「あ、ありがとうございます！ちょっとやりすぎましたかね？」

男 「良いの良いの、新人はそれくらいが良いの！」

女 「あ良かつた、ちょっと膝の震えとかわざとらしいかなと思つたんだけど」

男 「大丈夫大丈夫、大事なのは生の臨場感だからさ、もうガンガン演出入れちゃおう！」

女 「はい、わかりました！」

男 『サクラ、仕込み、やらせ、何でもバツチコイ』 オーケイ？』

女 「アハハ、オーケイオーケイ」

男 「デイズイズ、メディア！ユーノウ？」

女 「オー、アイノウ！」

男 「てかLINEやつてる？」

女 「やつてないです」

男 「えー、じゃあ何かしらの連絡手段は？」

女 「あ、何もやつてないです」

男 「え？」

女 「スマホ持つてなくて、」

男 「うそーん！おいAD！AD！」

ノブ 「はい？」

ノブ、呼ばれた勢いで、部屋からラジオの世界へ入る。

男 「おいAD！AD！お前だよ、来い！」

ノブ 「はいっ、はいっ、はいっ！」

男 「お前、呼んだら秒で来いつて言つたろ？パワハラしちゃうぞ！」

ノブ 「すいません！」

男 「あとADの分際で何回も呼ばせんな、な？パワハラしちゃうぞ！」

ノブ 「すいません！」

男 「飲み会セッティングしろ！」

ノブ 「はい？」

男 「だーかーら、飲み会！打ち上げ！」

ノブ 「ああ、」

男 「行くよね？」

女 「ああ、まあ、でも、あの」

ノブ 「ああ、まあ、でも、あの」

男 「ああん？」

ノブ「あのー、えっとー、」

男「なんだよ、モジモジすんなよ、早く言えよ」

ノブ「まだカメラ回ってるっぽいすよ」

男「マジで早く言えよ！」

男、退場

ノブ「じゃあ、行こつか」

女「オーケイ！」

ノブ、テレビの世界から女を部屋へ招き入れる。

(部屋)

女はアルミ製の合羽を着たまま部屋に入り、シームレスに「入島愛」を演じる。

この時、愛とノブ達は、パソコン越しでZoomで接続したままコミュニケーションを取っている。

ヤス、突然の来訪者に驚きテレビの電源を消し、段ボールの山へ隠れる。

愛「わー、新居だー、わー」

ノブ「築年数だいぶいつてるけどね」

愛「しかも、角部屋？」

ノブ「そうそう、こっちとこっちで2つ窓あんのよ」

愛「良いねー」

ノブ「あんま見ないでよ、」

愛「いいじやん、」

ノブ「昨日入ったばっかでまだ片付いてないんだから」

愛「わー、新生活だ、いいじやんー、わー」

ノブ「そんな良いもんじやないよ」

愛「良いんだよ、」

ノブ「『グリーンダヨー!』

愛「え?」

ノブ「え?いや、」

愛「ああ、そうそう、グリーングリーン……」

ノブ「あうん、えーてか何が良いのよ?」

愛「いや、引っ越しながら、人生で何回もできるもんじゃないし、」

ノブ「ああ、まあ確かに」

愛「ここもあれ?やっぱ自分のどこで?」

ノブ「え?」

愛「社員パワーで見つけた感じだ」

ノブ「シャインパワー? なにそれ、スーパー・マリオサン・シャイン的な?」

愛「違う違う、不動産の会社員パワーで」

ノブ「ああそうそう、」

愛「社割とか効くの?」

ノブ「まあ、気持ち程度」

愛「えー、利権じやーん」

ノブ「いや言い方よ」

愛「いやでも実際利権じやん」

ノブ「どゆこと」

愛「そもそもさ、不動産業 자체、ほんと利権だよね、」

ノブ「えーなになに急に、ディスってる?」

愛「いやいや、でも不思議だなーってなんか思っちゃって、ごめん」

ノブ「別に謝らなくてもいいけどさ」

愛「いやー、アタシそういうところあるの、悪い癖で、」

ノブ「どういうところよ」

愛「世の中のあらゆることに疑問を呈しちゃうの」

ノブ「呈しちゃうんだ」

愛「だってさ、土地って本来誰のものでもなくない? それに我が者顔で勝手に値段つけて売つてんだよ、面白くない?」

ノブ「おーい、一応それで飯食つてんだから」

愛「あ、ごめん、アタシ思つたことすぐ言つちやうタイプなの、悪い癖シーズン2、あ違うパート2、シーズン2つて(と、自分でウケる)」

ノブ「ドラマかよつ、つって」

愛「ねー、面白いねー」

ノブ「あうん……」

やや間

愛「……まあでもさ、良し悪しの話じゃなくてさ、単純によくよく考えたら、仕組み自体がストレンジだなって、つい」

ノブ「ああ、まあそうかもしないけど」

愛「それにノブノブは末端だから仕方ないよ」

ノブ「おいおい、売人じやないんだから」

愛「ねー」

やや間

ノブ「あー、腹減ってきたわ」

愛「あれ、晩御飯は?」

ノブ「食べてない」

愛「あ、今から?」

ノブ「いや、」

愛「えなにダイエット中?」

ノブ「違う違う」

愛「え、じゃあなたに?」

ノブ「いや単純に買い忘れちゃってさ、」

愛「オーマイガツ」

ノブ「まあじゃあ、あれかな、ピザ頼むわ」

愛「え?」

ノブ「なに?」

愛「この台風の中、ピザ頼むのって、」

ノブ「え、なに?」

愛「人間の道理に反するんじゃない?」

ノブ「えー、過言じゃない?」

愛「わかんないけどさ、そういう自分本位な行動の積み重ねがさ、、サンゴの死滅とか、オゾ

ン層の破壊とかに繋がるんじゃないの」

ノブ「ちょっと待ってちょっと待って、過言過言、」

愛「なに?過言?」

ノブ「アイアイ、モラル高すぎつよー、こういう緊急事態は向こうも書き入れ時なんだから、あ、パインツップルもつけちゃお。こつちはお腹いっぱい、あつちはお金いっぱい、みんな幸せいっぱい、おっぱいいっぱい、嘘嘘、あれアイアイ?」

愛、フリーズ。ノブはスマホを触っている。

ノブ「……あれ、Wi-Fiとんでもなくね?」

愛「え?」

ノブ「Wi-Fiとんでもなくね?」

愛「逆カズレーザー?」

ノブ「あれー、あ、今(バーが)立った……消えた……あれ?……(移動)あ、來た來た
來た!、(電波離れる)あれー?」

愛「もしかしてさ、この家壁薄いんじゃない?」

ノブ「あー、そうかも、」

愛「やっぱり」

ノブ「え、何なに?」

愛「隣で電子レンジ回してんじゃない?」

ノブ「どゆこと」

愛「いや電子レンジの電磁波が電波乱すって言うじゃない?」

ノブ「そんなことある?」

愛「あるある」(電波、うなずく)

ノブ「いや、都市伝説でしょそれ」(電波、首を振る)

隣室からチン！と電子レンジの鳴る音がする。

ヤス、驚いた勢いでおもちゃのライフルを持つて姿を現す。

ヤス「わあ！」

ヤスと愛、目が合う。

ヤス「わああああ！」

愛「えつ？えつ？」

ノブ「ああ……」

愛「ノブノブ、ランボー！ランボー！部屋にランボーいる！」

ヤス「ランボー！？」

ノブ「あー、違う違う」

愛「えつと」

ヤス「アツアツアツアツ」

ノブ「ああ、えーと、兄でーす」

愛「えつえつ、スチャダラパー？」

ノブ「いや実の兄、実兄」

愛「ああ、」

ノブ「兄の、ヤス」

愛「あっ初めまして～」

ヤス「……」

ノブ「ほら、兄ちゃんも何か一言くらい」

ヤス「ああ？」

ノブ「ごめんね、内弁慶で」

愛「ああ、全然そんなの気にしないで、」

ノブ「ほんと？」

愛「うん、アタシそういう人理解あるから」

ノブ「ちよつ、そういう人つて、」

ヤス「おい、」

ノブ「あん？」

ヤス「さつきの音、」

ノブ「ああ、」

愛「こんばんは……アイアイでーす」

ヤス「え？」

愛「あ、アイアイでーす、あの最近ノブ君と仲良くさせてらってて」

ヤス「お猿さん？」

ノブ「失礼だよ」

ヤス「そんなことより、いま、隣！」

ノブ「えー、もうなによ」

愛「隣？」

ノブ「ああ、気にしないで」

ヤス「耳の穴かっぽじれよお、昨日もきこえたし」

ノブ「大丈夫だよ」

愛「え、なになに隣で何が起こってるの？」

ヤス「組織……」

愛「え？」

ヤス「組織だ」

ノブ「ちよつ、いや、もう一、」

ヤス「組織の仕業だ……」

ノブ「やめてって」

愛「組織つて？」

ノブ「うん、いや、まあ、あの気にしないで、」

愛「気になるよ」

ヤス「お前誰だよ」

愛「え？」

ヤス「どこかで見たこと……」

ノブ「あるわけないじゃん、外出ないのに」

やや問

ヤス「組織の女だ」

愛「ホワット？」

ノブ「うん、兄ちゃんちょっとヤバいの、ちょいヤバ、あー人より感受性豊かなの」

ヤス「ノブ、目を覚ませよ。そもそもこういうタイプ、お前のこと好きになつたりしないよ」

ノブ「は？ なにそういう関係じやないって、」

ヤス「ビジンキヨクだよ！」

ノブ「は？ なにそれ？」

ヤス「お前ビジンキヨクも知らねえのか？」

ノブ「あー、美人局ね、ごめん愛愛、こいつやいてんだよ、アイアイが美人だから」

ヤス「別に美人でもねえし」

ノブ「兄ちゃんいいかげんにしろよ」

愛「まあまあ、美醜の判断は人さまざまだし」

ヤス「人さまざま族だ」

ノブ「いやいや」

愛「私一回出たほうがいいかな。私、あの、大丈夫だから、」

ノブ「ごめん、」

ヤス「(やつてしまつた、 という顔をして) ……言えよ」

ノブ「なんだよ」

ヤス「はつきり言えよ、俺、邪魔だろ！？」

間

ヤス「やだろ！こんな、邪魔だろ。悪かつたな、全部オレのせいで、」

ノブ「うん、邪魔」

ヤス「は？」

愛「ちょっと、」

ノブ「いや、いいんだよ、たまには言ってやらないと」

ヤス「……そうだよな、」

ノブ「そうだよー、邪魔だよー、どつか行けよー」

愛「ちょっとノブ」

ヤス「……」

部屋のインターホンが鳴る。

ノブ、応対。

ノブ「……はい？」

吉堂（声）「頼もう！」

ヤス「……道場破りだ」

ノブ「うん、ちがうよ」

吉堂（声）「夜分申し訳ありません。隣の、隣の者ですが」

ノブ「あ、行きまーす」

ノブ、退場。

気まずくも、愛とコミュニケーションするヤス。

愛「……ハロー」

ヤス「……」

愛「ああ言つてるけどさ、ホントはそんなことないと思うよ」

ヤス「……」

愛「アタシみたいな外野がどうこう言うのも、アレだけど、もうちょっと寄り添つてみたらどうですかね？」

ヤス「……」

愛「ノブくんも、ああは言つてるけど、ホントはお兄さんの事好きで好きでしようがないんですよ、多分」

ヤス「……なんで」

愛「だって、よくヤスさんの話してるし、」

ヤス「……」

愛「だめだこりや、」

ヤス「……うるせえな」

愛「なんで、そんな話し方しかできないんですか？」

ヤス「ああ？」

愛「何が怖いの？何をそんなに怯えてるの？世界はこんなに美しいのに」

やや間。

ノブ、戻ってくる。

ノブ「兄ちゃん、逃げて！」

ヤス「はあ？ なんだよ？」

ノブ「冗談冗談、ちょっとお客様に入るよ」

ヤス「なんだお前」

ヤス、再び段ボールの山の中へ隠れる。

ノブ、吉堂を部屋へ招き入れる。

吉堂、アルミホイルで包まれた大きなお鍋を持っている。

ノブ「あ、どうぞ、」

吉堂「ああ、おじやましま～す、」

愛「あ、どうも、」

吉堂「ああ、どうもどうも、アレ、」

ノブ「はい？」

吉堂「彼女さん？」

ノブ「いやいや」

愛「違います」

ノブ「オッホ」

愛「もつと、オーガニックな関係です」

吉堂「ああ、それはそれは、失礼しますた」

愛「えっと、」

ノブ「あ、えっと、ご近所さん」

吉堂「ああ、申し遅れました、隣の隣に住んでます、吉堂と申します」

愛「吉堂さんですよね？」

吉堂「え？」

ノブ「なに、アイアイ知ってるの？」

愛「逆に、知らないの？キチキチキツチン」

ノブ「なにそれ、フードトラック？」

愛「いや、ユーチューブ」

ノブ「えつ、ユーチューバー？」

吉堂「まあ、はしくれだけど」

愛「えつ、見てます見てます」

吉堂「ほんと??」

愛「あの料理、いつも、完全に自給自足で」

吉堂「そうねえ、ウンウン、」

愛「おどりぐい特集とかも、みてました。虫も食べてましたよね」

吉堂「まあ、ああいうのはちょっと客引きというか、ウン」

愛「タランチュラとか食べてましたよね」

ノブ「いやいや、」

吉堂「ああ、そんなこともあつたね」

ノブ「ガチすか？」

吉堂「いや冗談冗談、食べてないよ、ヌン」

ノブ「なんすか」

愛「人とかも、」

ノブ「ええつ？」

吉堂「食べないよ！ヌン、ヌヌヌン」

愛「ＴＰＰの加入も種苗法の改正も政府にアドバイスして」

吉堂「してないしてない、あの、ファンなのはありがたいけどね、それネットの勝手な書き込み

ノブ「えー」

吉堂「あ、なんかごめんね夢壊すみたいで、けどそのグラタンにはサソリとか入ってないよ、」

ノブ「えー入れてくださいよー！」

吉堂「食べたいのかよ、ははは」

ノブ「あつ、あははは、キヤハツ！」

吉堂「じゃあ……これ置いておくね」

吉堂、鍋をテーブルに置く。

吉堂「あ、じゃあ、またなんか、ご近所同士困ったことあつたらいつでも呼んでね」

ノブ「すみませんありがとうございます？」

吉堂「んじや、おやすみなさい、」

ノブ「あつそうだ、」

吉堂「はいはい？」

ノブ「お隣さん、って、どんな人かわかります？」

吉堂「お隣さんが、どうかしたの……？」

ノブ「いや、引つ越しの挨拶しても全然出てこなくて」

吉堂「ああ、なるほど」

間。

吉堂「まあ、 そうだね、 ちょっと、 やばい、」

ノブ「ちよいヤバ」

吉堂「うん?まあ何ていうか、 可哀想な、 青年、 かな」

ノブ「青年……?」

吉堂「いやいや、 人様のことだからあんま詮索するのはよくないよね、 ウン、 じゃあ、 グラタ
ン、 おいしく食べてね」

吉堂、 退場。

ヤス、 ノブがグラタンを食べようとしているのを見て止める。

ヤス「まさか食うんじやねえだろな?」

ノブ「えー」

ヤス「毒入つてたらどうすんだよ」

ノブ「なに言つてんの」

愛「え、 なにこれどうしたの?、」

ノブ「なんか作りすぎちゃったからおすそ分けって」

愛「すごつ、 めちゃめちゃ当たり物件じゃん」

ノブ「ねー(と、 句いを嗅ぎ) うわっ! すげつ、」

ヤス「アツ! クセツ!」

ノブ「おいおい、」

愛「えーなにどんな匂い?」

ノブ「なんて言うか、 濃厚」

愛「えー嗅ぎたい」

ノブ「届け!(と、 扇ぐ)」

ヤス「電波に匂いは乗らねえだろ」

愛「Zoomに匂い機能つけてほしい」

ノブ「ねえ!」

ヤス「アソツ、 そんな有名なやつなのかよ」

愛「『よーいドン!』に出たこともあるんだよ」

ヤス「じゃあ、 まあまあだろが」

ノブ「やめなよ」

愛「えー、 ちょっと見ようよ」

ノブ「えーと、 これか、 画面共有しまーす」

ノブ、 パソコンの再生ボタンを押す。

(YouTube)

吉堂「キチツ♪キチツ♪キチキチ、キツチン♪どうも吉堂です！」

吉堂、ブロッコリーを取り出す

吉堂「これブロッコリー♪グリーンで美味しそうだねえ（野菜をかじり）痛い痛い痛い痛い！
ビリビリビリビリビリー！！これは多分あれかな、デジタルメガフレアの味かな、これはね、味覚
をバカにします、絶対食うな！食つたら殺す！いや僕が殺さなくてこんな食べてたら死ぬ
ぞ！お前ら！な？」

(部屋)

ノブ、動画を一時停止。

ノブ「デジタルメガフレア？」

愛「デジタルメガフレア」

ノブ「なにそれ？」

愛「農薬」

ノブ「まるでデュエマじやん」

愛「うん、うん、」

ノブ「え、」

愛「わかるなあ、」

ノブ「なんというかさ、この人大丈夫なの？」

愛「何が？」

ノブ「なんか思想激しくない？」

愛「それが良いんじやない、このくらいしないと伝わらないのよ」

ノブ「マジで？」

ノブ、再び再生。

(YouTube)

吉堂「ということでお今日はね、吉堂オリジナル完全エコなグラタンを作つていきます、そこで
ジャジャーン、独自の手法で自家栽培した特殊野菜を使っていきます、皆さんこれがどうや
つてできるかわかりますか？わかりますかあ？そうです、人糞です！」

(部屋でノブ、食べかけていたグラタンを吐き出す)

吉堂「冗談冗談、本当は～ドウルドウルドウル！答えは次回！」

吉堂、退場

(部屋)

ノブ「なんだこいつ」

愛「何慌てんの？」

ノブ「いやいやさすがに引くでしょ、」

愛「いいじゃない、仮に人糞だったとしても」

ノブ「え？」

愛「循環循環」

ノブ「ええ？」

愛「そもそも私達のカラダなんて何一つオリジナルはなくて、ソトから来たもので構成されてるんだから、」

ノブ「まあ、そうだけど」

愛「何一つ無駄がない、素晴らしいアイデアだと思つたけどささ」

ノブ「じゃあアイアイ実践しなよ」

愛「何いつてんの、」

ノブ「ほらあ、やっぱり」

愛「いや吉堂さんの真似なんて普通はできないの、えてか、このさあ、真っ黒い動画投稿は何？」

ノブ「え？」

愛「キチキチキッチンの関連動画ででてくるやつ」

ヤス「これ」

ノブ「なんだろ」

(YouTube)

「1次元のキャラクターを模したお面をつけた間宮、登場。」

ノブ「なに」れ Vtuber~.」

愛「ちょいやバ」

間

ノブ「なんもはじまんねえじやん」

ヤス「気持ち悪、なんでこれが関連動画なんだよ」

愛「投稿者も意味わかんない文字列だし」

合成音声で吉堂の喋りが再現される。

「キチツ♪キチツ♪キチキチ、キッチン♪どうも吉堂です、これブロツコリー、グリーンで美味しいそうだねえ（野菜をかじり）痛い痛い痛い痛い！ビリビリビリビリ！！これは多分あれかな、デジタルメガフレアの味かな、これはね、味覚をバカにします、絶対食うな！食つたら殺す！いや僕が殺さなくてこんな食べてたら死ぬぞ！お前ら！な？」

(部屋)

ノブ「どういうこと？」

愛「吉堂さんの真似？」

ノブ「これ、兄ちゃん？」

ヤス「は？」

ノブ「兄ちゃんと同じアレじゃない？」

ヤス「違げーよ！」

ヤス、再生を止める。

ノブ「えなになに？」

ヤス「いや、」

ヤス、立ち上がり下手へ。

ノブ「ちよつとちよつとどこ行くの」

ヤス「いや、洗い物」

ノブ「洗い物？なにを？」

ヤス「……（ライフルを差し出し）これ？」

ノブ「そんなの普通洗わないって」

ヤス「普通普通うるせえな」

ヤス、キッチンへ。

ノブ「なんだよ洗い物って、飯も食つてねえのに」

愛「てかピザは？もう頼んだの？」

ノブ「あー、うん、そろそろ来るはずだけど」

間。

ノブ「あれ、ちよつと待つて、」

愛「何？」

ノブ、隣室の壁に耳を当てる。

ノブ「隣も洗い物してる?」

愛「そりや洗い物くらいするでしょ」

ノブ「いや、」

間

ノブ「あ、トイレ行つた」

ヤス、部屋を横切りトイレへ。

ノブ「ちょっとどど行くの」

ヤス「トイレ」

ノブ「嘘だろ」

ヤス「嘘じやねえよ」

ノブ「真似しないでよ」

ヤス「はあ?俺の便意は俺のものだよ」

ノブ「違うよ、その便意は兄ちゃんのものじゃない、かもしれない」

ヤス「何言つてんだお前」

ノブ「やめてよ」

ヤス「やめたら漏れちゃうじゃんかよ!」

ノブ「けど、」

ヤス「じゃあ何だ、ここでしろってか?」

ノブ「……まあ、最悪」

愛「ほんとに最悪じやない」

ヤス「お前、変だぞ」

ヤス、トイレに行つてしまふ。

愛「なに、どういうこと?ワツツハブン?」

ノブ「いやさ、兄ちゃん、ちょっと病的で、」

愛「それはまあアレだけど、でも個性的で良いじやない」

ノブ「いや、逆で、」

愛「逆?」

ノブ「どんどん個性がなくなつてるの」

愛「どういうこと?」

ノブ「兄ちゃん、引きこもりじゃん、ご覧の通り」

愛「まあ、言わば、」

ノブ「言わばね、で、なんか異様に耳が良いんだけどさ、」

愛「ああ、グレイト！」

ノブ「まあまあ、で、そのせいかわかんないけど、ある時から隣のこと異様に気にしだして」

愛「うん、」

ノブ「いつからか、隣人の行動を真似するようになっちゃったのよ」

愛「ええ、なんで？」

ノブ「うーんわかんないけど、嫌がらせ？なのかな？」

愛「嫌がらせ？」

ノブ「最初はわざとやつてたみたいなんだけど、最近はもう自覚もないらしくて、」

愛「それって、引っ越す前から？」

ノブ「そう、ていうか今回の引っ越しも実は、前の家で、」

愛「ああー、トラブつちゃったんだ？」

ノブ「そう、警察沙汰になっちゃって」

愛「オー……」

ノブ「環境変わつてもダメかあ……」

やや間

愛「でも、それってなんだか、素敵じゃない？」

ノブ「え？ 素敵？」

愛「それもさ、お兄さんなりの社会復帰なんだよ、きっと」

ノブ「意味わかんないよ」

愛「そういう方法で、人とコミュニケートしてるっていうか、アイデンティティを探つてるっていうか」

ノブ「ええ、」

愛「そう、いわばヤスさんなりの自分探しの旅なのよ！」

ノブ「まねっこが？」

愛「そう」

ノブ「なんでそんなのわかるのよ」

愛「いやわかんないよ、わかんないけどさ、でも世の中ほんとにいろんな人がいるから」

ノブ「……俺はそこまで寛容になれんわ」

愛「世界はノブノブが思つてるより広くて、豊かな、悪い人なんて一人もいないの」

ノブ「アイアイは世界を愛してるんだね、」

愛「そう、愛は地球を救うの」

ノブ「……オホホホ、おーい、山田くん、座布団もつてこい」

ヤス、登場。

ヤス「おもちろくない！」

ノブ「なんか変な感じになっちゃって、ごめん」

愛「いいの、どうせアタシは面白くないの、女だから」

ノブ「いやいや面白い女人だつていっぱいいるじやん、あアイアイ含めて」

愛「ノブノブはアタシのこと、好きなんだよね？」

ノブ「え、なによ急に」

愛「いいの、わかるから、もう言動の端々からわかるから」

ノブ「おう、えまあ、好き、かな」

愛「どこが好きなの」

ノブ「そんなの言わせないでよ」

愛「いいから」

ノブ「うーん、顔？」

愛「え？」

ノブ「うん、顔、かな。なんか、あの、脱毛の広告の人に似てるし」

愛「え、中身は？」

ノブ「なに？」

愛「中身は好きじゃないの？」

ノブ「いやいや、中身って（と、ウケる）」

愛「なにがおかしいの」

ノブ「何？筋肉とか内蔵とかそういう話？いや中身なんて見えないからわかんないじやん」

愛「いや違くて、その内面というか、性格というか精神の話」

ノブ「あー、まあ、それもまあ別にって感じかな」

愛「なんで」

ノブ「だってアイアイの言つてること、なんかどつかで聞いたことあることばつかなんだもん」

愛「はあ？」

ノブ「いやでも全然悪い意味じゃなくて、吸収力があつて良いと思うんだけど」

愛「なに？受け売りばつかのフェイク・アスつて言いたいわけ？」

ノブ「違う違う、いや、単純に人の中身に興味が無いつてか、あーこういうとアレか、あのー、なんて言うんだろう、内面なんてあつてないようなものというか、そもそもほら俺だつて空っぽだし、」

愛「いいの、どうせアタシにオリジナリティはないの」

ノブ「ちょっとアイアーティ、拗ねないでつて、顔は個性的なんだから」

愛、PCを閉じてZoomの接続を切り、部屋から退場していく。

ノブ「あーあ、キレちやつた、あー、クソー（と、その場で激しく卑猥に腰を振る）」

携帯が鳴る。

ノブ「なんだこの番号（と、携帯を取り）はいはい、」

(電話)

ピザ屋の店員、登場。アルミ製の合羽を着ている。

ピザ屋「あ、もしもし、端中様の携帯でお間違えないでしようか?」

ノブ「ああ、そうですけど、」

ピザ屋「あ、ピザ屋ですが……」

ノブ「ああ、ピザ屋か」

ピザ屋「ピザ屋でございます」

ノブ「で、端中様に何の用?」

ピザ屋「……はいっ?」

ノブ「だから端中様に何の用があるんだっての」

ピザ屋「……と申されますと、」

ノブ「何時間かかるんだって言つてんの!…三輪車で運んでんのか?」

ピザ屋「あの専用のバイクで、」

ノブ「わかつてるよ!」

ピザ屋「ああ!」

ノブ「どんだけ宅配に時間がかかるんだって話、イタリアで生地からこねてんのか?」

ピザ屋「あの、生地は千葉の工場で大量生産しているので、」

ノブ「わかつてるよ!千葉の工場とか言うな」

ピザ屋「はいっ!」

ノブ「で、いつ持ってきてくれるんですか?」

ピザ屋「あれ?先程、納品したはずですが、」

ノブ「はい?」

ピザ屋「いやあのお渡しの際に、その、『おもろくない!』と大変怒つてらっしゃったので、改めてお詫びをと思って連絡したのですが」

ノブ「いやまだ来てないんですけど、」

ピザ屋「あれ?」

ノブ「わけわかんねえこと言つてんじゃねえぞ?」

ピザ屋「大変申し訳ございません!!」

(部屋)

ピザ屋、絶叫しながら部屋へ突入し、合羽を脱ぐと、ヤスが姿を表す。

ヤス「ごめんごめんごめんごめん!」

ヤス、合羽を丸め込んで捨てる。

ヤス「俺、さつきからわけわかんないこと言つてない？」
ノブ「ずっと変だよ、またお隣さんの真似してた？」

ヤス「俺はもう、ダメかもしれない」

ノブ「なに？」

ヤス「たすけて」

ノブ「なんだよ」

ヤス「俺が俺じやないみたいなんだ」

ノブ「だーかーら、真似すんのやめたらしいじやん！」

ヤス「違う、やめたいけどやめられないんだよ」

ノブ「ふざけんなよ、お前のせいでなんかもう色々むちやくちやなんだよ」

ヤス「むちやくちやなんだよ！そなんだよ！」

ノブ「わかつてんのかよ」

ヤス「いや、俺もむちやくちやだけど、隣もむちやくちやで」

ノブ「はあ？ 落ち着けって」

ヤス「ちょっとお前、行つてきてくれよ、隣」

ノブ「やだよ、兄ちゃん行けよ」

ヤス「俺は行けない（吉堂のマネをして）行くぞー！」

ノブ「どつちだよ」

ヤス「『行くぞ』って何だよ！」

ノブ「お前が言つたんだろ」

ヤス「違う、今のは俺じやない」

ノブ「ちょっともう、どうなつてんの？」

ヤス「行け！ 行け！（声色を変えて）『行くぞー！』（元に戻つて）俺は行かない行かない、行

けー！」

ノブ「わかつたから、行く行く、止めて、」

ノブ、退場。

ヤス、隣室に耳をそばだてる。

間

ヤス「……来る」

吉堂、登場。

手には宅配ピザの入つていた段ボールを持っている。

吉堂「……おはようさん」

ヤス「あっ」

吉堂「ああ、ごめんドア開いててたから入つてきちゃつた」

ヤス 「ああ、え？」

吉堂 「グラタン、美味しかった？」

ヤス 「ああ、まあ」

吉堂 「端中つて君らだよね」

ヤス 「そうですけど、」

吉堂 「ノブってのは、お兄ちゃん？」

ヤス 「ああ、すいません、弟です」

吉堂 「ああそうなんだ、間違つてウチに届いちやつたみたいで、」

ヤス 「あつごめんなさい」

吉堂 「だめだよ、ピザなんて食べちゃ」

ヤス 「ですよね、」

吉堂 「なんでダメだか、わかる？」

ヤス 「……カラダに悪いから？」

吉堂 「まあそれもあるけどさ、知ってる？ アメリカではピザ屋の地下で子どもたちを売り買

してり、小児愛に狂つた民主党がピザ屋を人身売買の温床にしてるんだ」

ヤス 「はい？」

吉堂 「面白くないねー」

ヤス 「……はい？」

吉堂 「君ら、ピザゲートの関係者？」

ヤス 「ちょっと何言つてるかわからんんですけど、」

吉堂 「僕をアメリカに売ろうとしてる？ （と、ピザの箱でヤスを殴る）」

ヤス 「はあ？」

吉堂 「な、ピザは有害なんだよ、テロなんだよ、飯テロだよ（もう一度殴る）」

ヤス 「痛い痛い」

ヤス、近くにあつた段ボールで吉堂を叩き返す。

吉堂 「はあ？」

ヤス、もう一度叩く、

吉堂 「痛い痛い（と、叩き返す）」

ヤス 「痛い痛い（と、叩き返す）」

吉堂 「痛い痛い（と、叩き返す）」

ヤス 「痛い痛い（と、叩き返す）」

吉堂 「マネすんな！（と、叩き返す）」

ヤス 「マネすんな！（と、叩き返す）」

吉堂 「お前だろ！（と、叩き返す）」

ヤス 「お前だろ！（と、叩き返す）」

吉堂 「面白くない！（と、叩き返す）」

ヤス 「面白くない！（と、叩き返す）」

吉堂 「お前誰？（と、掴みかかる）」

ヤス 「お前誰？（と、掴みかかる）」

ヤス、吉堂の帽子を剥ぐ。

帽子の中からティンホイルハット（脳と電磁波を遮断する目的で作られたアルミホイ
ル製の帽子）が落ちる。

吉堂、頭を抑えてパニックになる。

ヤス、ティンホイルハットを拾う。

ヤス 「なんだこれ？」

吉堂 「ああ、僕のティンホイルハット！」

吉堂、ヤスに突進する。

ヤス、慌ててティンホイルハットを投げる。

吉堂、ティンホイルハットを奪い返し、かぶり直す。

吉堂 「セーフセーフ」

ヤス、スマホを持って何かを調べる。

吉堂 「ダメダメダメ！何してんの！」

ヤス 「ティンホイルハットってなんだよ！」

遠くから全身アルミホイルの電波人間が現れる。

吉堂 「あー、来ちゃった」

ヤス 「は？ 何も来てねえだろ」

吉堂 「いやいや」

ヤス 「何が見えてんだ？」

電波人間、ヤスの背後に回り、彼の尻を目がけて激しく卑猥に腰を振り始める。

ヤスは電波人間を認識することができない。

吉堂、その様子を哀れむ。

吉堂 「あのねえ、君は今、電波に……犯されてるんだよ」

ヤス 「比喩？」

吉堂 「やれやれ」

吉堂、電波人間に近づく。

吉堂「もしもし」

電波人間「僕が見えるの？」

吉堂「ちょっと良いかな」

電波人間「？」

吉堂「セイツ！」

吉堂、電波人間にティンホイルハットを向ける。
電波人間、悲鳴を上げながら吉堂から逃げる。

電波人間「『ティンホイルハット、スペース、なに』」

吉堂「聞こえるだろ？」

ヤス「何が？」

吉堂「電波の声が」

ヤス「さっきから電波電波って、何言つてるんすか？」

吉堂「よく見ろ！よく聞け！これがお前だ（と、ヤスの頭を掴んで電波人間を見せる）」

電波人間「電子レンジ、スペース、危険、スペース、電磁波、スペース、コミニケーション、スペース、とり方、スペース、ズットコベロリンチョ、スペース、意味、スペース、日本大好きおじさん、スペース、右翼、スペース、広告、スペース、アルゴリズム、スペース、ホントの自分、スペース、デビュー、スペース、ウザい、他人のマネ、スペース、無意識（と、ヤスの検索履歴を鳴き声の様に発する）」

吉堂「ああ、なるほどなるほど」

ヤス「何にも聞こえないだろ！」

吉堂「は？」

吉堂・ヤス「やっぱお前（君）、アレだな、病気だな、え？」

やや間

吉堂・ヤス「俺（僕）が病気……？」

吉堂「お前が、病気」

ヤス「お前が、病気」

吉堂「いやいや、」

ヤス「いやいや、」

吉堂「俺は」

吉堂「お前は」

吉堂「お前は」

吉堂「お隣さんと、同じ病気だよ」

ヤス「お隣さんと、お隣さん？」

吉堂「そう、お隣さん、」

ヤス 「お隣さんって、ここなの？（と、奥の壁を指指し）」

吉堂 「そう！隣の真似っ子モンスターと一緒に！」

ヤスの着信音が鳴る。

吉堂 「なんの音？」

ヤス、電話を取る。

ノブ、電話越しに登場。

ヤス 「もちもち？ノブ」

ノブ 「あ、兄ちゃん」

ヤス 「ノブ」

ノブ 「今、隣の部屋いるんだけどさ」

ヤス 「おう」

ノブ 「いやそれがさ、ずっとわけわかんないこと言つてて、全然話通じなくて」

吉堂 「弟さん？」

ヤス 「は？」

ノブ 「兄ちゃんの言うと通り、お隣さん、ヤバいかも、ちょいヤバどころじゃないかも」

吉堂 「ちよつとスピーカーONにしてくれる？」

ヤス 「ああ、（と、携帯を吉堂へ向ける）

吉堂 「ずっと声聞こえてんの！！」

ヤス 「はい？」

吉堂、ヤスに突進する。

間宮（声）「ズットコベロリンチョ！」
ノブ「はい？」

間宮、登場。

ノブに突進してくる。

雷鳴が轟く。

電波障害により、ヤスたちの部屋と間宮の部屋が混ざり始める。

吉堂、ヤスに馬乗りになり、携帯を奪つて話す。

間宮、ノブに馬乗りになり、吉堂の喋りを模倣する。

間宮は滑舌が悪く、ヤスはその滑舌の悪さを引きずつたまま喋りを模倣する。

ここで吉堂→間宮→ヤスのルートで言動が伝播していることが明らかになる。

ノブ「なんなんすか？」

吉堂「もしもーし、もしもーし！」

間宮「もちもーち、もちもーち！」

ヤス「もちもーち、もちもーち！」

ノブ「あれ、吉堂さん？」

吉堂「弟さん？」

間宮「弟さん？」

ヤス「弟さん？」

ノブ「ちょっと兄ちゃん何言つてるの？」

ヤス「わかんなねえ！」

吉堂「お前、おもしろくなーい！」

間宮「お前、おもしろくなーい！」

ヤス「お前、おもしろくなーい！」

ノブ「はい？」

吉堂「行くぞー！やつちやうぞ！」

ノブ「やつちやう？わあああああ！」

吉堂「わあああああ！」

間宮「わあああああ！」

ヤス「わあああああ！」

吉堂「行くぞー！」

ヤス、吉堂のティンホイルハットを剥ぐ。

吉堂「わあああああ！」

間宮「わあああああ！」

ヤス「わあああああ！」

ノブ「なになにどうなつてんの？」

吉堂、ライフルをヤスに向ける。

ヤス、咄嗟に銃のように吉堂にリモコンを向ける。

吉堂「ヒイツ！（と、ライフルを離し手を挙げ、頭を守る）」

ヤス、テレビの電源をつける。

リポーターの女がテレビから現れ、吉堂の頭を掴んで話し始める。

砂嵐音。

吉堂「ギャア！！」

女「本州に上陸した、超オウアアアイウー、キャサリン・ゼタ・オーンウの影響で、アク雷や暴ウーがアツエイイ、電波塔に被害がエエオイ、大規模な電波障害が引き起こされるアオウエイが、オアイアウ、イアアア、ウエウエオ、オイオウエウアアイ」

吉堂「やめろ！！！」

吉堂、テレビを破壊する。
女 消滅。

吉堂「ブルブルブルブル！（と、電波を振り払うように頭を激しく振る）」

間宮「ブルブルブルブル！（と、電波を振り払うように頭を激しく振る）」

ヤス・ノブ「マナーモードみたい……」

吉堂「ああ、クソ、台風のせいで電波が一層スペイシード」

ノブ「吉堂さんどうしたの？」

ヤス「なんか知らんけど多分ピザにキレてる！」

ヤス、部屋をでようと吉堂の前に立ちはだかる。

吉堂「返せ……」

ヤス「ノブをどうするつもりですか？」

吉堂「弟さんは！人身売買関係者の可能性があるんだよ！」

間宮「弟たんは！ちんちんあいあい関係ちやのかのうていがあるんだよ」

ヤス「ちんちんあいあい関係ちやのかのうていがあるんだよ」

ノブ「ないよ！そんな可能性！」

ヤス「そうだよ、ないよ！」

再び雷鳴

吉堂「Wi-Fi飛びまくってんなあ！！！」

ヤス、ラジオとパソコンで吉堂の頭を挟む。

吉堂「ああ！ダメダメダメダメ！痛い痛い痛い痛い！ビリビリビリビリ！痛い痛い痛い」

吉堂、何かに取り憑かれたように叫び始める。

吉堂「イタイイタイイターライ、ニッポンダイ！ニッポンダイ、ニッポンダイ！ニッポンダ

ーライ！瘦せたーい！モテたーい！脱毛したい！」

……ああー！入つてこないで！出でけ！出ろ！出ろ出ろ出ろ出ろ出ろ！」

間宮「ベロベロベロベロベロベロ……」

ヤス「ベロベロベロベロベロベロ……」

吉堂「せいつ！」

吉堂、ヤスを振りほどく。

ヤス、携帯を吉堂の頭にかざす。苦しむ吉堂。

吉堂「ひぎいいいい」

ノブ「……あの吉堂さん？ 吉堂さん、ちょっと社会的にね、変よ」

吉堂「脳に直接話しかけるなあ！」

間宮「さて、激変する現代社会。一体私たちはどう生きていくべきでしようか」

ノブ「は？」

間宮「それでは最後に、本日のゲスト、ニッポン大好きおじさんからメッセージをいただきましょう」

吉堂「僕は日本を愛しています！」

間宮「まさに愛は地球を、いや日本を救うと」

ノブ「あれ、アイアイ？」

吉堂「でも、愛だけでは、どうにもならないこともあるんだよなあ」

間宮「愛だけではどうにもならない？」

吉堂「時には愛ゆえに厳しく接する必要もあるのではないかと」

間宮「愛と憎しみは表裏一体、と」

吉堂「ニッポン DIE—ニッポン DIE—ニッポン DIE—ニッポン DIE—ニッポン DIE—ニッポン DIE—ニッポン DIE—セイッ！ セイッ！」

吉堂、ラジオやパソコンを破壊する。

以下、吉堂とノブの掛け合いとなり、間宮とヤスはそれぞれのエコーとなる。

吉堂・間宮・ヤス「ふうふう……日本は終わりだ、日本死ね！」

ノブ「吉堂さん、そもそもピザごときで怒ってるけどさあ、ピザどしたの」

吉堂「……食べた」

ヤス「え？」

ノブ「どうでした？」

吉堂「……（キッパリと）おいしかった……」

ノブ「そうそう、みんなそう思うよ？ そういうのいいんだよ」

ヤス「五郎さん？」

ノブ「もつと食べたいとか、やせたい、とかモテたいとか」

間宮「ホントの私、デビュー！」

吉堂「でも、ピザは、」

ノブ「それあれでしょ？ えーと、ソース、○アノンの民間デジタルソルジャー部隊のコミュニティ

サイトでしょ？」

吉堂「お、え、よく知ってるなあ！」

ノブ「俺には肯定できないけど、でもなんかあれでしょ？ なにかしら、それなりに信じれる何

かがあるんでしょ多分？」

吉堂「……よくわかつてるじやん」

ノブ「からっぽだからね。まあ、まずは穩便に話しましようや、」

吉堂「チームン、作戦を変える。飲み会セッティングしろ！」

ノブ「はい？」

吉堂「だーかーら、飲み会！打ち上げ！」

間宮「飲ーんで飲んで飲んで♪」

ノブ「じゃあ今からここで、（手をクイクイしながら） どすか？」

吉堂「おう、行くぞー！」

ヤス「え、吉堂さん」

吉堂、ヤスのほうを向く。

ヤス「これで、いいんすか？」

間。

吉堂「いいんだよ！」

間宮・ノブ「グリーンだよ！」

吉堂とノブ、退場。

間宮、吉堂に対応して退場。

ヤス「……何が良いんだよ、何も良くねえだろ」

残されたヤス、手元のティンホイルハットを見つめ、恐る恐るかぶる。

静寂が訪れる。

外の雨音がラジオのノイズ音のように、低く小さく小刻みに響いている。

ヤス「あれ？もしもし？ノブ？あれ、（壁越しに） おーい！」

間宮「おーい」

ヤス「吉堂さん？」

間宮「吉堂さん？」

ヤス「……隣の人？」

間宮「隣の人」

ヤス「三人は？」

間宮「二人は？」

ヤス「おはようさん！」

間宮「おはようさん！」

ヤス 「……お前何だよ」

間宮 「お前何だよ」

ヤス 「俺は俺だよ」

間宮 「俺も俺だよ」

ヤス 「俺か？」

間宮 「俺か」

ヤス 「お前俺か？」

間宮 「お前俺か」

ヤス 「いつから俺の真似してる？」

間宮 「いつから俺の真似してる？」

ヤス 「ノブのやつ、俺が誰かの真似してるっていうんだよ」

ヤス 「わかんないんだよ」

間宮 「わかんないんだよ」

ヤス 「なんか、寒いね」

間宮 「寒いね」

ヤス 「こだまじょうか」

間宮 「こだまじょうか」

ヤス 「ごめん、本当に真似をしないでほしい」

間宮 「ごめん、本当に真似をしないでほしい」

ヤス 「ばーか！」

間宮 「ばーか！」

ヤス 「バカバカバカバカ！ベロベロベロベロベロ！q w x wo あん d w、いたつ舌かんだ」
間宮 「バカバカバカバカ！ベロベロベロベロベロ！q w x wo あん d w、いたつ舌かんだ」

ヤス 「(ライフルを壁に構えて) 真似すんな！」

間。

間宮 「お前が、すんな」

恐怖でライフルを放つヤス。

爆音の後、静寂。

放心状態のヤス、おもむろに電子レンジの扉を開け、頭を突っ込む。

ヤス 「中身になりたい、中身になりたい……」

電子レンジ、チーン。
暗転。

明転。

台風一過。

愛とノブが段ボールを片付け、引っ越しの準備をしている。

二人は全身アルミホイルに包まれ、電波と区別がつかなくなっている。

愛「おはようさん」

ノブ「おはようさん」

愛「これ、もつてく?」

ノブ「あ、うん、それももつてって」

愛「はーい」

ノブ「ごめんね、手伝わせちやつて」

愛「ううん、その……私のせいかもだし」

ノブ「そんなことないよ、愛は地球を救うんだろう」

愛「それ、面白くないよ」

ノブ「おもちろくなーい?」

愛「やめて」

間。

愛「どこ行つちやつたんだろ、ヤスさん……」

ノブ「わかんないけど」

愛「無事だといいわね……」

ノブ「引きこもりの引っ越し、からの引きこもりの行方不明」

愛「全然引きこもつてないね」

ノブ「ほんとだ、おもちろいね」

愛「え?」

ノブ「いやおもしろいね」

どこからともなく音楽が聴こえる。

愛「(ノブを指し) あんたの?」

ノブ「違うよ、これ、ヤスの着信音だ」

愛「どこから鳴ってるの?」

二人、音源を探すが見つからない。

腰をかがめ探しているうち、スクワットのような上下運動へ移行していく。

次第に波のようになっていく。そして世界へ溶けていく。